

## 学生の皆さまへ

一生ある意味は何か――皆さまは、よ  
問ひに浮かんではありますか。  
、お質問の私が始めた理由は、うなが  
皆さまの年ごろの人たちが抱きがちの問題で  
あり、また、若者カルトに係わる契機  
とも、するからです。

オウム真理教による事件以降も、「カルト」に  
対する警戒感の呼びかけにもかわらず、その  
被害が跡を絶たずしてます。そのため、  
「カルト」に関する講座が貴校に開設されたの  
よう。そして、講師の方から、「カルトへの  
入会を防止するための手紙」が皆さま宛に  
書くようお詫びがあり、そのうえ、引き受け  
させて、いただきました。それが私の義務と  
思われたのです。

私は地下鉄サリン事件の実行犯です。  
被害関係者の皆さまと筆舌に尽く一難、  
惨苦にわなせてしまいました。今ここには  
心から申し訳なく思ひ、謝罪の言葉も  
見つけられません。また、社会の皆さまにも  
多大な迷惑をおかけ致しました。今の  
贖罪は、私がかかる刑に服うこと、おわ  
てなります。やめて、よもうと  
悲惨な事件の再発を防止するための  
一助になれることが願い私の経験を述べさせて  
いただきたく思います。

カルトに係わる契機前述のよろづカルトへの入会を防止するための手紙」と依頼されたのですから、わゆるカルトのメンバーとしては、私はオウム真理教の信徒の経験とかありますんで、主にオウム真理教（以下、オウムまたは教団）の話になります。

カルトは多様なものが多く、提示して入会の勧誘をするやうです。オウムもその唯一の目的であります解脱、悟りたりでなく、ヨガによる健康法や能力開発の方向からも勧誘するより私どもに指示して頂いた。よろづめ

信徒の入信理由は様々でます。

1. 1. 1. 信徒の入信理由の特徴は、たとえば「生きる意味」に対する問題のより多く解決が極めて困難な問題に關係があつた。これは「生きる」よりも、「生きる意味」には事に對する生きがいなどの日常的、生々らしさがある。たとえば、「生きる」に「目的」に「意味」があり、形而上のもの、えることである。これは事に對する生きがいの日常的、生々らしさである。しかし、問題は、よ世にむけた解決が困難です。仕事に對して生きがいが感じられず、それは適当な仕事を探せばよいのですが、「生きる意味」は、人生目的、人生の存在 자체問題によるところである。

ところが、オウムは、超越的世界觀を有し、よ類の問題を解決する機能があります。私は、日常を超えたオウムの世界觀をおうちは、「生きる意味」や「生きる」に「目的」の解答が

手をもつてから、信陵が「世尊」觀を豪容する問題が解決する。他方、「世尊」觀は非現実的であるために、あれど豪容一人に信陵は一般社会における生活に適応していく。「家族や学校、会社」を離れて生家一人で、さうに教団で集団生活において、もううらに規範意識まで非現実的、教義に沿うものに、ついに違法行為をするまでに至ります。

「生きる意味」に対するのはカルトに係わる契機にも、さうのり、その心理状態への適切な対処を考える必要があると思します。

そのため、手の具体的な活用です。

私自身は、高校三年生のとき、「生きる意味」の問題を明確に意識する。それは、  
「生きつけ」は、家電商店で値引処分された商品を見たことだ。商品価値がたちまち失われる光景を見て、もやさしさを感じたのです。それから今以来、私は、いつも、さうの感覚を通じて「世尊」を見つめてしまふのです。事あるごとに物事の価値が気にかかる。結局は、宇宙論の「うづくら」すべては無に帰してしまつだけでは、のつかない思ひ浮かびこむ。しかし、私は生きる意味——絶対的価値の追求を持つことにしたのです。よこには、それまでは大仰に思えた「朝に道を聞けば夕べに死す」とも可らず、述べた孔子の気持ちがわかる

よつゝ気が一通り。

よつゝ心の情の間一では、文献を調べます。古今東西、類似の経験で一人人が多数存在しますよつづく。スピノザは著書『知性改善論』の冒頭で次のよう述べています。

一般生活において通常見られるもののすべてが空虚で無価値である、ここ経験によって教えられました。私にひいて恐れの原因であら、対象であつたもののすべてが、されに自己では善ても悪ても、よく、いたゞかされによつて動かされた限りにおいてのみ善めよ、は悪を含むことを知つた時、私はついに決心した。我々のわざり得る真の善で、他のすべてを捨ててたたずみによつてのためか、動かされよ、或るものか存続しよ、か、どうか、やむべからん、一人ひきずりと發見し、獲得した上は、不斷最高の喜びと永遠に享受できよ、或るものか存続しよ、か、どうかと探究してみよつ。

(スピノザ『知性改善論』島中尚志訳  
岩波文庫)

トルストイもその一人です。当時五十歳だった彼は、外的的には申し分なく幸福な状況で、だが価値観の崩壊があり、「生きる意味」の模索が始まります。今までの「情」で、彼は

著書『日懺悔』に記してます。

何やうひどく、奇妙な状態が、時おり私の  
内部に起る。よくて、かゝまるで見当がつかず、  
べきか、何をするべきか、まるで見当がつかず、  
よくて懷疑の瞬间、生活の運行が停止し、  
しまつまつ瞬間に私の上にやってくる。  
ううん、ううんの声で私は度々失ふ。  
憂苦の底に沈むのであつた。かくうして  
状態はまるでなくすゞさり、私はふたたび  
從前のよつて生活を続けていた。やがて、  
ううう懷疑の瞬间が、層一層頻繁に、  
いつも同一の形で、反覆されるようにな  
つて来た。生活の運行が停止してしまつた。  
よつて、この状態にどうは、いつも『何のために  
に?』『』で、うかうか先は?』『ううう同一の  
疑問が湧き起るのであった。

その時に最も私の心をもとめていた農事に  
関する考察の間に、突然、つよいよつよつと疑問が  
起つてくるのだった。  
『ううう、お前はサマラ県に六千デシヤ  
チナの土地、三百頭の馬を持つてゐる。  
が、うれでどうした? うんだ? ...』『ううう  
私はところどころにまつてしまつて、うかうか  
さき、何を考へてよいか、わからなくて、うらめだ。  
またある時は、子供達は自分はどういう  
具合に教育していいか、ううう考へて、  
うちには何のため? ううう自分に言う

のであった。されどさういふとんでもない人たる  
民衆に幸福を獲得せざるところがどうだらう  
か、うそとて考察して、さうちに、へだが俺に  
何のかわうがゆう? 『突然、う自問  
せざるを得ず、もつた。また、私の著作が私に  
もたらす名声につづき考えられた時に、こう  
自分に向つて反問せざるを得ず、もつた。  
『トモトモ、お前は、ゴーゴリや、ブーシキンや、  
シェーラスビヤや、モリエールや、その他、世界中の  
あらゆる作家よりも素晴らしい名声を  
得るかも知れぬ。かく、さればどうして、う  
んだ? ……』、されば、待つて私は何一つ答える  
こゝがでさうかつた。よし、と、よし、と、う  
待つて、うごく、うごく、すぐに解答へかけられは  
まじぬ。答えるが、ければ、生きて行くことが  
でき、うめだ。いかにも答えるは、うめだつた。  
自分の立つている地盤がめちやめちやに、うつた  
うつた氣持ちが、うつた。うつて立つべき、何物も  
うつた氣持ちが、もはや、うつてしまつた  
生活の根底が、もはや、うつてしまつた  
うつた氣持ちが、うつた。今や自分には、生きて  
いくべき、何物も、うつた氣持ちが、うつた。  
(トルストイ 横濱原久一郎訳  
岩波文庫)

以上の記述は、当時の私の心情と共通する  
点が多くあり、よ種の心理状態の特徴を  
よく表現して、うと思ふ。特に、自分の  
立つている地盤がめちやめちやになつた

気持ちがいい。立つべき何物も、  
よし、気持ちがいい。しかし表現には共感を  
覚えます。それゆえに絶対的、価値をおめる  
心理になります。どうか。

その後私は哲學書や宗教書を満喫したり。宗教の実践者の活き聞かたり。高校三年生です。大学受験の時期です。私は大字の付属高校に通つており、わゆるエスカレータ式に学部に進学する予定でした。時間はふんだんに使えないのであります。哲學につづくは、活は論理的に進行して、ものすが、その根本的部分——数学で、えは公理——は哲学者個人の感性によつて、真理とみます。からとうに思えます。私は、よくめざめんでいた。宗教につづくも、私に反射的になつた。反対は、真偽とのよつて確かめるのかどうか、抵抗して、教義の核心が非現実的に思われ、根拠にはうれど、容でえ

ううーー私の生きる意味の探究は行き  
詰まつてしまつたのです。でもうも、絶対的、す  
く価値をおめらこり、ものねだりであります。  
これは半ばわかつて、ナニか、いかに宗教界に  
はトメられて、ナニか体得する人間  
が在ります限りは、自分で確かめざるを得ない  
心境だつたのです。

結局私は、むづかしさを感じて済む実行可能、生きる意味を定めることによつて、

心のバランスをとるよつた。私は  
理系の分野に興味があつたので、将来の  
職業はその方面以外考えられませんでした。  
ですが私は物理法則を利用して基礎的  
技術を開発する研究を目指すことにしました。  
理想的には半導体素子の発明のため、  
研究だと思つた。よつて仕事として、  
すぐに価値があることはよくまた、  
されど世の中の役にも立つて考えました。  
されど先のことをつづくは、あれど考えるこ  
何もできず、するので、困らつむるしかあり  
ませんでした。

よつて、何年かの間、私は生きる意味の  
問いを棚上げして過ごしてきました。しかし、  
のちに、この問いの影響によって宗教的経験が  
起き、オウムに入信することになりました。  
その経緯につづくは後述致します。

次に、生きる意味への問いが起る原因に  
つづくですが、以下のよう、よ種の問いは  
生理的不安定の起因するものあります。

思春期から十代後半（今は二十代始めに  
入る）まで、成長一つつある人は重大。  
生理的不安定（すなわちストレス）です。  
ストレスホルモンは、後の成人時代の安定期  
に比較して有意に増加す。青春期に  
典型的な大きな気分の揺れは、より不安定  
さに結びついてる。若者は取るに足りない、

欲求不満がある。多幸感のある熱狂の  
自暴自棄的口落ともかも一れり。  
人生の、よ期間に問われる典型的の  
問いは次のものである。“うふが一体何に  
するのか” “人生より何が重要” “うふが  
あるのでは、いか” “よもじか” “衝動は  
自己認識の危機の問いで極まる。“私は  
一体何か” “何の現実か”

(Pewinger, Michael A "Neuropsychological  
Bases of Good Beliefs" Praeger, 1987)

また、心理学者のウイリアム・ジェイムズも、  
人生のあらゆる価値に対する欲望が失われて  
いく「憂うつ」状態の「休まる」この「  
問い」に駆り立てられ、人が宗教や哲学に向かう  
ことを指摘している（ウイリアム・ジェイムズ  
『宗教的経験の諸相』上巻 四田裕三郎訳  
岩波文庫）

「生きる意味」に対する問いが純粹に知的の  
ものではなく、それは皆人の健全な精神の  
成長にもたらすからである。しかし、以上の  
より重要なものの、いは、無意味、むごたので、  
自覚してそれに巻き込まれて、必要なうえで  
思います。よよつて、理に関する知識がある  
だけでも、ある程度の予防によるかも一れ  
り。場合によつては、専門家と相談す  
め要もあるで、よう。特に、うの問い  
たりや煩わしさを感じるならば、注意

たへます。性急の解決は固りかねます。  
ただけカルトに接近す危険があります。

それでも、「生きる意味」の問い一あうには、  
ほのかの問題の解決を宗教とは止め  
すめの思想に求めます。今は今選択には  
細心の注意を払うべきです。前述のように、  
得て解決は超越的境界觀に訴えざるも  
ざれるのです。現実生活への影響が懸念  
される伝統宗教にはどうだと思しますが、  
安全性、有益性が歴史によって検証  
されてる場合は問題ありませんよ。よ  
り、1以下要素を含むものにつきは  
避けたへます。

## 宗教的経験

カルトの超越的世観によって、現実世界に於ける解決の困難な問題が解決する。前述べた、地方、よの類の世界觀は非現実的であるために、豪容の困難なもの事実です。ところが、神祕体験、超越体験などと呼ばれる幻覺的、宗教経験は、その豪容を著しく促進します。

オウムにおどしも、教義の正当性の根拠は、何種の宗教的経験？！つまり、多くの信徒は教義の世界を幻覺的に経験しておらず、世界を現実として認識していません。地下鉄サリン事件への関与は減じ思ひがあり、後悔してりますが、この事件につつても、宗教的経験から私は教義上の救済の認識を行いました。

よほど宗教的経験は、殺人を肯定する非現実的な教義さえ豪容させる原因になります。一人がって、宗教的経験を根拠とする思想や、あれ起す技術の使用には注意すべくです。

以下、宗教的経験の検討のために、私の経験を述べさせて、いたしましたと思います。

前述の通り、高校三年生のときに私は、生きる意味の問題を意識するようになりました。しかし、その後私は自己引いた本を読んだり、簡単な瞑想を指導する団体に入会したり、ものの、その問題は棚上げ状態でした。



大学で学ぶことが将来の職業に直結するの、  
学業や学費のためのアルバイトに忙殺されて  
いたのです。

よくよくこみ、偶然、私は書店で麻原の  
著書を見かけたのです。昭和六十三年二月ごろ、  
大学院一年のときです。その後、関連書を  
何冊か読みました。彼の深い解脱・悟りが  
気がかります。

最終的解脱・悟りは、絶対自由・絶対幸福  
絶対歡喜の境地であり、本来、私たちは  
その状態に居住して、そこにもりかわらず、煩惱に  
かられたり、ために、輪廻して苦界にまよ、  
続けて、いろいろとされてきました。絶対自由、  
これは、カルマ(業)転生する原因の解放され  
この世界に転生するもの、最終解脱の状態に居住  
するのも自由です意味で、絶対幸福とは、金、  
名譽など自分以外の外的條件を要して、  
幸福という意味で、絶対歡喜とは、自己が  
存在して、いるだけで歡喜状態にあります、う  
意味で、

不明な点多、ものの、何とかの絶対的幸福、  
境地の存在が事実であれば、今追おは、生きる  
意味は、値すのでは、とも思って、  
また、麻原は修行を完成させて最終解脱の  
境地にあり、弟子を指導して彼らとも解脱  
させて、るこのことで、麻原や弟子たちの  
体験談を読むと解脱への確かな道が存在  
して、もう一つに思えます。彼らの体験には  
普遍性が感じられるのです。さらに、麻原は自身の

体験の二重属性と、ダライ・ラマ十四世とはトメ  
すチベット仏教やインドの聖者たちの交流  
して確認したのです。

前述の解脱のより、教義の信だけでも、  
フイクションを読んで、るより、もので、  
よよつて実証的、優勢は理解できる、こ  
で、よしは、私が今まで接した斯界の  
ものは達して、ると思、  
いか、事は、簡単で運びませんで、  
麻原が主宰するのは、宗教団体、オウム真理教  
だつたのです。これら、当時、オウムはほんと無名の  
団体でした。

私は新宗教に神として拒絶反応が起らるのを  
禁じ得ませんでした。輸血拒否事件、靈感  
商法等、新宗教に関するマスコミ報道は、  
決まって言つて、不快感を催すものでした。  
うわけ、輸血拒否事件は、高校三年生のときに  
話で聞いた団体のことでしたので、新宗教に対する  
問題意識が高まりました。  
この事件の報道では、事故に遭った子供が  
生きたこと、言つて、ためにかりわらず、両親が  
教義に従い、輸血を拒否したこと、されてしま  
る、団体の聖書の解釈が、これ、どう保証は  
いたか、私にはほかの解釈も可能と思え  
ました。よよう、不確實、ここに基づく  
命を犠牲にするのが信とされるました。  
それが、この事件で、私の新宗教に対する不信は  
決定的るものになりました。私は本を読む以上、オウムに  
よつて、わざで、私は本を読む以上のオウムに

近づけよかつたのです。

ところが、本を読み始めた一週間後から、「」  
不可解のことが起りました。修行もして、「」  
のに、本の書きかげて、「」  
体験が、私の身体に現れたのです。そして、

約一ヶ月後の、昭和六十三年三月八日深夜の二  
十時。

眠りの静寂を破り、突然、私の内部で爆発音  
が鳴り響きました。それは、幼いころに山奥で  
聞いたことがあります。発破の音です。

音は体の内部で生じた感覚があつたものの、  
はるか遠くで鳴ったように、奇妙な立体感が  
ありました。

### 「クンケリニーの覚醒」

意識に戻った私は、直ちに事態を理解しました。  
爆発音と共にクンケリニーが覚醒した——読んで  
いたオウムの本の記述が脳裏に閃いたのです。  
クンケリニーは、ヨガで「命エネルギー」とい  
ふと呼ばれるもので、解脱するためには、必ず  
覚醒せざるつまり活動する状態にさざらされ、  
不可欠であるのです。

続いて、粘性のある温かい液体の音、ものが  
尾底骨から溶け出していく音でした。本によると、  
クンケリニーは尾底骨から生じる熱、エネルギー  
このことでした。そして、それはゆっくりと背骨に  
沿って体を上昇してきました。腰の位置まで  
くると、体の前面の腹部にパツン広がりました。  
経験したことのない世のものは思えません。  
感覚でした。

「ウンダリニーの動きがじくじく、ウモ膜ト出血を起す。指導者、「の覚醒は危険だ」オウムの本の記述は別世界の話だ。今や、我が身に起りつつある現実で、私はウンダリニーの動きを止めようと試みる。しかし、意思に反して、ウンダリニーは上昇続ければ。

ウンダリニーは胸まで上昇する。胸には、広がった。ヨガでいうチヤクラ（体内の靈的器官とされる）の位置にくると広がるようだ。ウンダリニーが喉の下まで達する。熱熱の上昇感とともに、代わりに、氣体のよつとものが上昇してきた。これが頭頂まで達する。压迫感が生じ、頭蓋がククッときく。音が聞こえない。それでも私は身体を硬くして耐える。かくす術がある。突然の出来事に、どうするかと思ふが、ふとピーカに一連の現象は収束した。どうやら、無事に済んだようだ。

「オウムは真実だ」オウムの宗教的世界観が、一瞬にアリティード帯びて感じられる。麻原ケル（修行を指導する師）にて、解脱・悟りと目指すこれが私の生きる意味であると確信する。麻原の著書を読み始めて以来相次ぎた体験は、彼の強い縁感にていたからです。ウンダリニーが自然に覚醒したのは、前年のケルの著書を読んだために、修行者だった私の前年の記憶が甦ったからだと思ふ。

のように、急激に宗教観念を受容して、思考体系が一変する心理現象は、突然の宗教的回心と呼ばれます。されば漸進的・宗教観念の受容との違いにつき、研究論文には次のように述べられてます。

突然の回心は、被験者そのもので全く変えられるよりに思われる経験として定義します。では、よく、彼にもたらされるよりに思われるたまに、その変化は、被験者の生活様式、道德的特性を形成する態度におけるものだ。たゞ、漸進的・宗教的発達は、上で説明したよつて経験から、どう特徴のもので、さて被験者が自身を無信仰と識別したとき、ものである。

すべての回心者は、疑いの余地なく、無信仰の状態から信仰深い状態に至った。

二つの集団の特色をかり、よりよく示す、二つの自伝をトピに引用す。一人の突然の回心者は、彼の経験を次のよう記述した。

、私の経験は、私が一四歳の秋に起きた。私は畑を耕して働いた。突然、嵐が近づいた。すぐに思われ、さてあたかも私の周りの全てが止まつた。私は神の存在を感じた。馬たちは完全に止まつた。状態になつた。真っ黒の空がござらいた。

私は祈った。嵐はすぐに通り過ぎたが、  
その瞬間だった、「私は祈り、それが  
主が望む。」とは、クリスチヤンに、すら  
主に仕える決意の人のは。

漸進的、宗教的発達の一人の集団の員は、  
彼の経験を次のように記述した。

私が信仰深く自覚したときを説明する  
のは難い。それに却て何年か前に私は  
十ボンドで生まれ、そして現在はそれより  
いくつ重いこの事実を説明するのは、  
全く簡単だらう。よ成長には出来事の  
印象が、わけでは、いかに少しく  
とも回想では、よくプロセスはわざりに  
完全に連続して、よく霞んでいる。だから  
私が自身の認識に現れた時と、思ひ  
出でる以上に私は「信仰深く」と、た  
時々、分離でき、私はずー一つの出来事  
はほこんで同時に達して、そこへ戻る。

(John P. Kildahl, 1965, Pastoral  
Psychology, September, 37. The Personalities  
of Sudden Religious Converts.)

これが、宗教的因素は人が葛藤状態に  
からめられ、葛藤が解決するまで  
だ。また、突然の宗教的因素における常識  
が非常迅速脱一にビリーフ・システム(思考

体系が容容される場合があります。ナード、カリスマ、マグループの一つの注目せざるを得ず、特徴は、入会の特徴がしばしば劇的、田舎の経験であるなどと、われています。

(Marc Galanter. 1976. *Cults and Charismatic Groups Psychology*. In Edward P. Shafraanske Eds., *Religion and the Clinical Practice of Psychology*. American Psychological Association.)

私の場合、生きる意味に係わる葛藤のために、  
何か起き、オウムの教義体系が容認された。  
つまり、非現実的、世界觀が突然現実化  
して、感づられ、それが容認される、これがもう一つ、  
超越体験に基づく世界觀には要注意である。よう。  
後述のように、それが日常生活との間に摩擦を  
生じる場合は問題が起らなければ、

オウムの宗教的世観が現実となつた。私は、  
入信以外の選択はめぐらしくない。また、  
新宗教うんぬんこうして、られる状況ではあり  
ませんで、た。ウンダリーニーが覚醒した以上、  
指導者は不可欠だつたのです。私はウンダリーニー  
をコントロールできず、頭蓋がきんでもする術が  
ないのです。その状況につづり、ある共犯者は、  
「高瀬君は本を読んだだけでウンダリーニーが覚醒し、  
困つて教団に相談に行つたと言つて、た。ある種の  
困惑感を高瀬君から感じた」と法廷証言して、ます。  
うして、オウム真理教の社會信陵にての

生活が始まります。1. 紅家信徒は、社会生活ヨガの教義の學習、守戒、教義の実践、ヨガの行法、奉仕などの修行をすることが基本です。オウムの教義と修行の目的について、あとの話の理解のために必要な部分のみ説明致します。

教義ばかりで、修行の実際の目的は前述の最終解脱です。つまり輪廻の解放されたり、生れたり死ぬは輪廻の解放されど、限り苦が生じるのです。それで解脱されければ、これは、今は幸福でも、幸福で、もろ善業が尽きてしまえば、これまでに爲してした悪業が優位になります。若一かの世界に転生する、うえで、特に地獄・餓鬼・動物の三つの世界は三悪道と呼ばれ、信徒の最も恐れる苦界です。

それに対して、解脱はすべての束缚から解放され、崇高の境地です。解脱に至るには、次のようになります。私たちが本来の最終解脱の状態から落として、つた原因を除去して、そこから必要な説教をしてやります。

私たちには自己が存在するだけで完全な状態にあります。にもかからず、他の存在に対する執着が生じるために輪廻転生を始めたとされて、また、それ以来、私たちは煩惱（私たちの苦しみの世界に結びつきる執着）と悪業を増大させ、それによって世界に転生して肉体を持ち、苦しみ続けて、るこのことで、たとえば、殺生や嫌悪の念は地獄、盗みや貪りの心は餓鬼、

快樂である、いや眞理（精神を高める教え）  
オウムの教義）を知らず、これは動物の如きが  
転生す。原因によるべからず、また、

かゝる煩惱の行為は、過去世のものも含め、  
情報にて私たちの内部の蓄積にているこの、  
てた。よ高積された情報がカルマ（業）  
にてた。そして、悪業にてた人せ尊い転生  
する。つゝに、自己のカルマが身の上に  
返ってくる。ここでカルマの法則といふも  
重要、教義である。

カルマの法則の考え方、解脱、つまり輪廻  
の開放の必要のは、転生の原因となる  
カルマを消滅（淨化）することです。すると  
オウムにむづくは、カルマの淨化が重視され  
修行はよだれのものである。

「お前述の「殺生」は、虫を殺すにも含み  
ます。ですが、手はかく拳げた行為もうう  
ですが、一般人の日常的、行為はほんとが  
悪業となります。したがって、信徒につても、  
入信前は悪業と為しておこなう。かくして  
淨化し、限り苦界へ転生することになります。  
ひよし、信徒たちは死後の修行をして、また、  
また、家族など周囲の非信徒たちは苦界への  
転生を避けられ、かくして、かれは信徒  
たちは家下で、また、後述しますが、日常  
生活を相容れ、かくよ教義のために一般社会は  
苦界への転生に至らせる世界のみであります。  
よし、ために、信徒は一般社会を離れて出家し  
ます。さうに、苦界へ転生す現代人。

救済する目的で、殺人未だ犯すことに「うき」  
また、オウムの教義において、麻原は「神」と  
いえらねねで、人間は、最終解脱者で  
あり、様ざまと「神通力」を有すとされていた  
のです。特に麻原は、人を解脱させたり、  
高い世界（幸福、世界）に転生させたりする力が  
あると主張して、自分たちに「エネルギー」  
を移入して最終解脱の状態の情報を与え、  
代わりに苦界に転生する原因とする悪業を  
引き受けろ——「カルマ」を負うとしている  
——と説いていたのです。カルマを浄化して、そ  
う界へ転生するのです。カルマを背負つて  
くる麻原は、まさに「救済者」「神」として、  
麻原の指示が絶対だったのも、よもや「救済  
の能力」を有したためでない。オウムの世界觀に  
おいては、苦界への転生の防止が最優先である  
ところ、麻原の指示の目的は、苦界へ転生する  
人類の救済であつたのです。

四回による教義の受容の後、入信後は、私の  
身の上に個々の教義の体験が現われ、教義の  
世界觀に対するアリテイーがますます深まり  
ました。たとえば、入信の一週間後に、麻原の  
「エネルギー」と「感動」の体験が現われました。  
麻原の「エネルギー」と達めたときふる石に触れた  
ところ、気体のようなものが私の身体に入つた  
ときました。そして、胸いっぱいにならから倒れ  
きつたのです。よこはハッカを吸つた

ようの感覚が一、私は自身の惡業が淨化されたと思ふ。

その後も様ざまの形で、よりよる体験を重ねた。私がつて、麻原がカルマを背負う能力を有す、これは現実だ。このために、麻原は神でめぐらす指示は絶対だ。のです。お現社は、よ種の経験は暗示の機制による幻覚と理解してます。つまり、以前に接して、た工ネルギーを移入してカルマを淨化する、う教義(二十一頁)が暗示により、工ネルギーを込めたされる石に触れたから、教義でめぐらす幻覚が現れるものと思ふ。このように、幻覚が現れるものは思ふ。このように、幻覚的経験が極めて起きやすくなる。

やめの男が一、麻原の地位が教団内で絶対だつたことに對する疑問の声をよく聞きます。その理由の一つは、私と同様に、信徒によつては、麻原が神に対する教義の世界觀が現実だつたからです。ヨガの行法によつて多くの信徒が教義どおりの宗教的経験をして、たのです。現役の信徒は、今も、麻原の力でカルマが淨化される、感動する体験をして、いるのです。麻原が法廷で何んと見ると堪え、振る舞つても、彼は神でめぐらす続けて、いるのです。私もうつて、たが、信徒が帰依して、るのは、生身の麻原では、よく宗教的経験によつて知覚した麻原です。現実によつても、宗教的経験のほうがありテイバあります。

よつよつ宗教的経験の作用につづく文献には次のように述べられてます。

アメリカで「ナーチー」は国際的に現在見られる多くのカルト様の「ビルーフ・システムと概観することは、臨床医が特定のセクトをレリー評価するにあたり役に立つ。ビルーフ・システムは、一般に部外者を困惑させるもので、多くは超越体験や神秘体験に基づいている。あるものは、「ナーチー」の東洋の伝統から得ている。あるものは、教義を再構築する程度にまで既存の宗教を粉飾する。

超越体験あるいは神秘体験は、田嶋プロセスにおいては「一は重要だ」と、よこにはジエイムズコロイトが注目した。葛藤の解決における超越体験は、非精神病者と精神病者の両方に急性の幻覚的エピソードが起る程だが、より重要性も強調されてきた。これらの経験はまた、カリスマセクトの多くの会員にとって、ケループの会員と統合せらる總体である。これら出来事は、類似した現象と経験したことがある他の人たちとの友好関係と、最高潮に高められた強力な感情的経験による。

宗教的経験のコンテクストにおける

精神病様超越現象が生じたところを説明できるモデルは、まだ開発されていません。しかし、注目すべきのは、以下に注意す

引く知覚現象と、よりのセクトの会員が普通に報告すこである。たとえば、一つのゲループの百十九人の会員のうちの三十分ペーパントが、瞑想中に幻覚様経験を報告した。明らかによつて現象は、理学者がビジ常、精神的プロセスのみ、もしくは病的プロセスと理解するのにもかゝらずの影響があるはずだ。これらはたぶん、精神病といわれらる人に幻覚状態を起すありのコシニクストの性質を、理学的に理解する助けになるだろう。

(前出 Galanter )

(A教団は)夢さえも「お父様(教祖)の夢を見ますよ」として暗示で与えて教祖の夢を見やすさうに誘導したりす。身辺でおきる現象がすべて神やサタンといつた。靈現象をもえることによって、もうと思われる。さらに、うーた経験が西田の「う個人的現実性を高める。つまり、体験や推論が教義と整合してから」、認知をもつビリーフは強化される。

(西田公昭 一九九五 ビリーフの形成)

変化の機制についての研究(4)

社会心理学研究二二八一(二九)

(プライミング——特定の情報に接触することでによって、人間の情報処理を一定の方向に誘導すること)

瞑想のより高い段階は多くの経験を含む。  
これは伝統的、文献によく載つてゆり。  
明るい光の「ヴィジョン」、身との喜びに満ちた  
陶酔感、静けさ、明晰な知覚、および  
愛や献身の感情などをも含む。“超意識”  
“超越体験” “神秘体験” やつには  
“ウンタリニーの覚醒”、名づけられてゆり。  
これらの状態は人を引き込む影響有り  
及ぼす。この影響は瞑想の伝統によれば  
非常に深刻なものである。

(Mark D. Epstein and Jonathan D. Lieff,  
1981, Psychiatric Complications of  
Meditation Practice. *The Journal of  
Transpersonal Psychology*, 13, 137 - 147.)

まことに宗教的経験記の状態に近づくは  
俗的、社会的、個人的、精神的な問題  
報4/20 1980

(Raymond Prince and Charles Savage,  
1966, Mystical States and the Concept  
of Regression. *Psychedelic Review*, 8.)

以上から宗教的経験記の状態に近づくは  
状態は非現実的、教義の離脱や日常  
生活からの離脱を促進するのである。

オウムの信徒制度には、在家のほかに出家があります。オウムの出家とは、世俗的・関係を一切絶ち、麻原に全生涯を捧げ、人類の救済最終的には解脱せらるべき自己の解脱に専念することです。

出家者は教団施設内で共同生活をすることになります。家族とも絶縁の形になります。解脱するまでは会うことも、連絡すらも禁止です。財産はすべて教団に布施し、私物は一切所有できませんのは許可されないもののみです。飲食できるのは給与されるもののみで、通常、外食は禁止です。本・新聞、テレビ、ラジオなど、教国外の一切の情報に接することも禁止です。これらの戒は苦界に転生する原因となる執着を切るためにそのためのものです。

入信時、私は出家をまったく考えて、ませんでした。長男という立場上、親の老後を見たとき思つて、だからかもしれません。私が出家する家庭が崩壊しかねずとも思つて、だからです。でもとも、入信前に読んだ麻原の著書によると、在家中でも解脱可能だとのことで、もう無理をしてまで出家する必要を感じました。

自分が培つてきしたものと崩すのは真剣のことです。入信間もなくから、私はめぐらし在家信徒生活を始めました。彼は出家の準備のため、定職を捨て、アルバイトを一ヶ月、おおむねの生活を聞き、私は恐怖でさえ抱いています。実際、

昭和六十三年十月の私につけて、母は「就職の内定を喜び、安心して、る様子だった。旨法廷証言。」  
「それから私は出家することになりました。私の入信後、勢力拡大のために、オウムが出家者の増員を図ったのです。私の入信前的一年半の間に約六十人が出家一人につき、入信後の一年間にには約二百人が出家一人につき。  
現代人は悪業を為すために来世は苦界に転生す。世纪末の核戦争が起る。(本文二十一)  
麻原は人類の危機と叫びます。しかし、その救済のためとして、信徒に布教活動させたり、さらには出家の効要性と訴え多くの信徒に生家をせしめます。  
よつて、一般社会は苦界への転生に至らせる世尊について洗脳されて、主張するが如きをうちに、今この通りの体験が私に起ります。このうち私の公判にからず、友人が次の二つの言ひ方をします。  
昭和六十三年晚秋か初冬に私が話題一人の内容です。

町中で歩くとバイブルーションを感じたり、電車内や駅構内、広告を見ると頭が痛くなり、繁華街の近くにいるとき体調がわからなくなったりという活がります。

当時、私は街中で歩いたり、会話をすますべて非信徒の方と接したりすますて苦界に転生する力が強くてくるのが感動しました。よ感覺の後には、気味悪、暗、世界のバイブルン(非常に

鮮明で、記憶に残る夢や自分が奇妙な生物になつたヴィジョン——カンガルーのよう、頭部で、鼻の先に目がある——などと見えた。この経験は、カルマが移り、自身が苦界に転生する状態にいたことを示すとされて、また、さうして体調も悪くなるのを、麻原がエネルギーに込めた石を握りながら、カルマを浄化するための修行を行なければ

また、一般社会の情報は煩悩を増大させて、人々と苦界に転生させることを説かれて、また、よみに情報をよっては、接するに頭痛などの心身の変調が起きたのです。

地方、当時、日常的に麻原のひ地位エネルギーが頭頂から入って心が清澄になり、自身のカルマが浄化されるのを感じます。これらの経験によつて、一般社会が人々のカルマを増大させて苦界に転生させたのに對し、麻原だけカルマを浄化できる、アーユルビンドー博士によつた。そのため私は、麻原の従くことより一般社会で通用する価値観は苦界に至らせると思つた。すなはち、解脱・悟りを目指すことになり意味を見出せなくなりました。

この状況に因縁するとして、検察官のム瀬川が生家の原因、理由と聞くに至ります。確認に付く、私の指導教授は「結局、神秘体験だと言つて、たゞ法廷証言して、ます。」當時、私は教授にも入信勧誘をしてしまいます。また、出家するに至る可能性の高い親を救うことにするのも思つて以

うまんだ。子供が出家する。親の善業によるこれまでの心づけ。出家にあたり一番の障害は親子の情ですが、それを除くためにオウムではなくトトロに流されて、いたのです。

うーーー。私は出家願望を抱くトトロ。まことに。世纪末の人類の破滅、うタクイム、リミットにいらみ、家族の説得に要する期間や就職が決まって、事情よりも考慮して、二、三年後の出家にすると思つた。

よよよ。昭和六十三年の年末、私は麻原の呼び出され、一、麻原は校済が間に合わない、もう自分の都合と言つて、られる場合では、二、出家を強く迫ります。私は麻原に従い、大学院修了後に出家する約束。一九九一年一月一七、平成元年二月末に出家。一九九一年。

私の出家後、平成元年の四月から、麻原は「アジラヤー」の教義に基づく校済を焼き、はためきした。現代人は悪業を積んでおり、若界に転生するから、ボアーテ校済をするといふのです。ボアーテは対象の命を絶つことで悪業を消滅させ、高世界に転生させる意味です。よボアーテは、前述（二十一頁）のように、麻原に「カルマを背負う」解脱者の情報を与え、悪業を引き受けれる一能力があることを前提としています。

その初めての説法にからず、麻原は仏典を引用して、数百人の貿易商に殺して財宝を奪おうとしている悪党がいたが、釈迦牟尼の前世はどうして、この悪党が生き家畜に向かうか。私は指名されたので、どうして捕えるかと答えます。ところが釈迦牟尼の前世は、悪党に殺されたのです。私は殺されるよりも更業を犯して苦界に転生すほうより苦しまむのを、殺して予め防ぐことを意味します。今まで私は虫を殺すことを固く禁じてきました。しかし、ここで麻原は、仏典を引用して「殺人」と肯定したのです。

「ハハ、よこさは、直ちにボアレの実践を続いたわけではありますまい。最後は、まあ、今日君たちに話しておこうとは、心が弱いほど成就は遅くなることが多いから結んでいます。私も、実行に移すことには到底思えません」

ところが、麻原は説法の内容を次第にエスカレートさせていきます。今後の説法では、「末法の世(仏法が廃れ、人々が悪業を為して苦界に転生する時代)の救済を考えるならば、少なくとも一部の人間はヴァジラヤーの道を歩かなければ、真理の流布はできなくなる。思わずかしくてござり得えてます。されば、出家者一同は「はい」と答えてゆり、ボアレーが疑問を呈する者は皆無くなつた。(日ヴァジラヤー)コース教學システム教本ロード教団発行の

## 説法集より

前述（二七〇～二八頁）の通りに、私はこゝでは、現代人が苦界に転生するここ、麻原がそれを救済できる、これは宗教的経験に基づく現実である。ですが、私は「アシラヤーナ」の救済に疑問を抱く、これが我慢力である。が、麻原は、私が述べたよう、宗教的経験を根拠として、お教えを流す。さうに私は、わゆる幽体離脱体験（肉体とは別の身体が肉体から離脱する通りに知覚する体験）ともあつたの、私たちの本質は肉体ではなく、肉体が滅んでも魂は輪廻を続ける教義を現実として感ずる。そのため、よせににおける生命よりも、転生を重視するオウムの価値観に同化してしまった。よっても、「アシラヤーナ」の救済を受容した背景だと思えます。

よつて、説法が展開されたとき、私は解脱・悟りのための集中修行に入りました。第一回は、立位の姿勢の体を床に投げ出しつの礼拝三九一日、食事も摂らずに不眠不休で繰り返しました。このときは熱い気体のよう、麻原の「エネルギー」が頭頂から入るのを感じ、またたく間に疲れ、そして集中して修行できたり驚きました。

、お集中修行において、最終的に私は赤、白、青の三色の光をおぞれ見て、ヨガの第一

段階毎の解脱・悟りを麻原が認められ  
た。特に青・光はみじんで、自分が宇宙  
空間に投げ出され、一面に広がる星を見て  
「もうまうだ。」から先は、それに対する  
執着が生じたために、私たちが輪廻を始めた  
ことあるものだ。今まで輪廻の原因と見極  
め、これは輪廻の脱一の経験（＝解脱）と  
意味である。

解脱・悟りを認められた後は、以前は身体が  
固くてまたく組めなかつた蓮華座（兩足首  
とももの上に載せる座法）が組めるようになり  
ました。教義によると、これはカルマが淨化され  
た結果と考えられます。また、食事の味気  
なく、少しだけでも噛んで、もうまうに感し、食事に  
対する執着が消えたように思えます。  
さうして、小さなことにこだわらなくなり、精神的に  
樂になります。

以上は麻原の「エネルギー」と受けた結果の  
ように思われたので、彼が人のカルマを淨化して  
解脱・悟りに導くまでの実体験について書いた。

平成二年四月、麻原は古参幹部乙理系の  
出家者計二十人に對して、極秘説法を行った。  
冒頭、「今つくて、いつも何で何ですか、分かるか  
と私に向いました。」はらく前から何とかの  
菌の培養を指示されて、このアス。目的は  
聞くが、されませんで、指示の雰囲気が  
危険の菌を、これは分かります。私は  
ヴァンラヤーの救済をする旨を答えるよ

一年間说话されて、今実行が当然のところ  
ようになつていたのです。

麻原は、こううか分かつていたのかと云い、  
「アジラヤーの経済の開始宣言」をした。

「衆院選の結果」平成二年二月の衆院選に、  
麻原も教団関係者二十五人が出馬し、全員が  
落選。現代人は通常の布教方法では救済  
できぬところが分かつたり、「われらはアジラ  
ヤーナでいく」

「一、麻原が指示したのは、猛毒のボツリヌス  
トキシンを大量生産し、気球に載せて東洋中に  
散布する。二、私たちは、その場で各人の  
仕務も指示され、直ちに作業に取りかかる。」  
「三、私はボツリヌス菌の大規模培養、容量  
十立方メートルの水槽四基の責任者である。  
作業は過酷である。アジラヤーの経済に  
よる。麻原は血道を上げるので、指示を怠ける  
私は寝る暇もない。」  
「約三か月間教団の敷地に缶詰めにされ、  
風呂にも二度いかれずして一人。でも、  
関連部品の購入のために業者を訪問すること、  
「指示された入浴である。」  
「安全対策も杜撰で、非常に危険な状況での作業  
である。結局、種菌さえできてもつかないことが  
後で判明した。」  
「しかし、どうしていつも私たちが  
真先に死んでいたと思います。」  
「私たちは、一般社会では無差別大量殺人。

ボツリヌストキン散布計画が中止された後、

み、され行爲を指示され、いかにも厳しく、作業が続かず、人が誰も疑問を口にすこなく、淡々と行動してしまった。外部の人々が見たり、役人の準備をして、ころには思えなかつたのでよ。

これは私たちにとって、ラヴァジラ・ヤーナの救濟宗教的経験に基づく現実だったからです（本文三十一頁）。そして出家後も次のようにヨーリアリティは深まるばかりだった。

一般社会が苦界への転生に至らせるときに、関しては出家後初めて外出したときに、以前に経験のほどの激烈なカルマが移つてくるので感づて（本文二十七、二十八頁参照）、危機感を覚え手元に生家者に対する外部との接触を厳しく制限する。教団以外部の悪影響を警戒して（ハ、これが暗示だ、など）と思します。また、テレビ・コマーシャルを視聴したところ、この音楽のイメージが頭の中でぐるぐると繰り返される。よつて、集中力が削がれ、経験があつた。

私は選舉運動中に、麻原の指示でオウムに用す報道録画（私のこと）だ。私の要調に気付いた麻原が、現世の情報が悪影響を与えてからと作業の中止を指示したので、一般社会の発す情報への警戒心が強まり

私は集中修行に入りました。そして、自分の意識が肉体から離れ、上方のオレンジ色の光に向かう経験（アーチ）、ヨガの第二段階目の解脱・悟り（麻原の「認められました」）。また、認められたうの場で、毒ガスホースゲンの生産プラントの製造計画（平成二年十月）<sup>1)</sup>、三年八月、中止（オウムでは、次の計画の指示が入り、前の計画が中止されました。これが多かった）に加わるよう指示されました。その後も、

プラスマ兵器、レーザ兵器の開発（同四年十一月）<sup>2)</sup>、五年十二月、中止）、ロシアにおける武器調査（同五年二月～五月）、炭疽菌の散布計画（同五年五月～六月、失敗）、オーストラリアにおけるウラン調査（同五年九月）、自動小銃AK七四千丁の製造（同六年二月）<sup>3)</sup>、七年三月、一丁完成、逮捕（ため中止）、<sup>4)</sup>（麻原の「指示されました」）。ようやく、オウムは、ヴァンラヤーの救済への実践は日常的でした。

1995年、平成七年二月、私たちは地ト鉄にサリンを散布する指示（村井秀夫の「受け取り」）、麻原の意思（「うむ」）<sup>5)</sup>。指示は、当時の私には、苦悶に転生する人々の救済（「か見えず」）<sup>6)</sup>、一般人が抱く「あらう、殺人」と「イメージ」があつたのです。

地ト鉄サリン事件に関する共犯者の調書を読むと、私たちが事も無げに行動して

いる様子が散見されます。そのような記述を  
読むと、残酷な事件が偶然と起って、ついに  
被害関係者の皆様に対しては、「中  
止」と思ります。誠に愚かです。

「オウムの宗教的貢献は没入して、る状態です。  
」「たゞ一、私は決して軽い気持ちで事件に関与  
したわけではありませんでした。救済とは、え、  
ボアの行為であるものは、通常の殺人と同様に  
悪業ではありませんでした。されまでは  
カルマの淨化に努めました。これが救済のため  
にカルマを増大させる行為です。これがアシラ  
ヤ・ナ・校済の意味付けられて、たのです。すな  
かるマは修行によって再び淨化する必要があり  
ます。でも、このカルマの法則（本文二十頁）  
によって、自身に返ってくるとされて、たのです。  
実際、地ト鉄のト車ーた後、私は突然  
うれつが回らなくなり、サリン中毒になりました。  
気が付いたのです。今こきはカルマが返ってきていた  
と思ふ。」

以上のように、オウムにからでは、非現実の教義が  
宗教的経験によって容認されました。そして、  
宗教義が社会通念と相容れ、ものばつた  
ために逸脱した行動が、あります。  
地方、禅にも宗教的経験に基づく技法と  
用います。悟了同未悟一悟り終われば  
凡夫に立ち返る。こう教えられます。  
これは、禅の瞑想技法によって起る

日常生活への不適応（本文二十五頁）を防ぐ  
安全装置では、どうようか。何代にも  
わたって存続して、る宗教には、問題が起る  
のを回避する。知恵の蓄積があるのに思えます。  
宗教的経験に基づく技術や手の経験に基づく  
思想に係わる場合は、予め弊害の予測が困難  
ので、よつては、経験的に安全性が保障されて  
いることを確認する必要があるでしょう。  
また、私は宗教的経験によつて教義の検証が  
可能で思、オウムに関する心持つたのです。されば  
大きくなる、温りで、人間の感覚は決して常に  
真実を反映してゐるわけではありません。併し、  
神祕体験の「理」状態は次のようにいわれてゐり、  
幻覚と真実の認識してしまつてゐるもの  
です。

神祕的、状態は比量的、理性ではなく、この  
で、真理の深みを洞察する状態である。  
されば、眞理は照明天であり、啓示であり、どこまでも明瞭に  
言え表わされえ、しかしも、意義を重要さに満ち  
て、る。そして普通、され以後は、一種奇妙な權威の  
感、トニ伴ふうのである。（前出ジエイムズ）

幻覚的、宗教経験によつては、決して、客觀的  
な真実は検証できません。であるのは、「主觀的」に  
教義を追体験す、に過ぎず。余以上のもの  
ではあります。

ですが、宗教的経験はめくまでも、個人的、  
真実として内界にござり、決して外界に適用  
すべく、はめません。オウムはあれど、外界に  
適用して過ちを犯したのです。

## 恐怖の喚起

恐怖の喚起す思想も極めて有害です。オウムにおいては信徒の思考や行動が教義に沿うものに着しく制限されます。

1. 1. その思想に触れて間もなく、彼らは

恐怖心を喚起する部分を含んでいます。  
多くに気付かずからもれません。私自身も、  
クニヤリーナの覺醒前は、麻原の著書の地獄・  
餓鬼・動物などの記述はまったく気に

ませんでした。  
その経験を振り返りますと、私の話がこれまで  
おらず、苦界へ転生する恐怖の因縁は  
無視でき、要素として、その恐怖の実感  
であります。信徒特有の思考や行動は理解が  
困難になります。実感は難いからもれ  
ませんが、その恐怖のために、人さえ自身の  
生命や健康が損われる事態に直面しても、  
悪業をする行為はまったくしてしません。私の  
経験では、次のことがありました。

地下鉄サリン事件のこと、私がサリン中毒にな  
ったのが（本文三十六頁）あらかじめ指示さ  
れていた通りに、送迎役の信徒が車で教団の  
附属病院に連れて行つてきました。どうやら、  
病院関係者に私が伝わつておらず、事情が  
わからず、まことに。しかし私はサリン中毒と  
伝えられました。一方でアシラヤーの救急隊  
の任務に因るとして関係者以外に話すこと

更業に止めたのです。結局、私は病院での治療を断念し、医師の林郁夫のところ集合場所に行き、治療を受けました。

まことに地下鉄サリン事件で逮捕された後、教団の指示でいつも当番弁護士と一回お願いして、拘留場所で教団に伝えます。しかし同一理由で事件に関す相談はできませんでした。  
常識的には弁護士に相談しないといふ人、取り調べを受けます。また、それと一緒に孤立立ちであります。自分では、自分では、あくまでもこれは重大事件で逮捕された状況において極めて不利です。

1. 更業をする行為は止まざんとする。

さうに事件の動機である「アジラヤーナの救済」の教義（麻原の地下鉄サリン事件への関与については、供述する無間地獄（宇宙の創造）の破壊まで）長期間苦しま地獄）に転生しかねません。また、この教義と聞く資格の人々は皆、人の活生生を理解され、その人々が将来にわたって救済されようとするもの、われわれがやがて一人、この事件の検査期間内には供述できませんでした。

取り調べの最終日、事件の核心部分を追及すす検察官は更業を犯すと、すなわち同時に死の攻防がありました。

問 麻原尊師のことで事件の動機、目的も活きなければ反省したことはありますか。

答問答  
活させ、理由は何か。  
お活であります。

質問す。  
今回の事件はアジラヤナの教義に基づくものではなか。

答えられません。  
アジラヤナは、ボアシのために他人の  
絶つとも許されるのではないか。

答えられません。  
麻原尊師が流されなか。

答問答絶問答命問答人問  
答えられません。  
村井江大師の指示は、かうるものでも  
かねずともうてはあらまん。  
では、どうい場合に従わなくていいか。

答問答絶問答命問答人問  
何ともえません。  
やはり従わなくてはまん。

答問答絶問答命問答人問  
今田の事件は、麻原尊師の指示ではなか。  
黙ります。

答問答活  
黙ります。

答問答活  
今田の事件の後で、君は麻原尊師に

件の報告をします。  
ある信使が描いた図を見せながら〇〇が

図より描き、君たちの報告一覧に記述

るのに活かしたものか。

問 君は今回の事件に関与した仲間に  
つづりは活いているのに、なぜ事件の目的や  
動機、報告につづりは活かしたものか。

答 例へば黙秘するのは、それが麻原尊師に  
係する部分だけではなく、他のものも  
あります。點秘密分ります。

當時は、さうへく悪業ばかりで、より  
教団には無関係としていた。地下鉄サリン事件  
における自身の行為はすべて供述して  
います。  
1. カー自身のことは供述しても、  
事件の動機や麻原の関与を供述しなければ  
反省して、これまでされ、身を滅ぼしかね  
ない状況で、(1) 加えて、質問の内容の  
検察官が立ち位置を既に知っていることは  
分のう一般的見地では、私が供述しても  
准拠にも影響しないことは十分に理解できる  
状況で、(2) それでも、金縛りにしても  
あつかいのよつて供述でき、(3) ひのびて  
あつかいのよつて供述できます。

以上のように悪業とされる行為ができて、さう  
傾向は、ウンダリニーの覺醒直後に現れました。  
オウムに入信する段になると、気には掛かたのは、  
複数のグル(修行の指導者)の指導を  
受けたこと、その黒いカラーネルギーの影響で  
精神が分裂することの麻原の著書の記述

丁度、當時、私はやうに脳想団体に入会して、いたからです。私は不安に、もう、ウンケリニーが覚醒して、今日に、団体の脱会届と郵送してしまった。

また、私は釣りが好きだったのですが、今では悪業になると、ウンケリニーの覚醒以来一度も行きました。今ほのか虫も殺せなく、するといつて恐怖のために、教義で悪業をされら行為はできなくなってしまったのです。

よつよつ状態は、次のようにな。宗教的因心にちり現れることがあります。

私たちはある思想と繰り返し繰り返し、いたり、ある行為と繰り返し繰り返し、いたり、する。しかし、その思想の真の意味がある日はためて、私たちの心から響き渡るものである。あることは、その行為が突然、道徳的に不可能、またはに一変してしまのであります。

### (前半 ジュイムズ)

オウムの信徒には、同様に、悪業をすこしに強い抵抗を感じる者が多數いました。このような宗教的悪業の教義に関して、文献では次のようにかれています。

さうに、宗教が單独で精神的问题を引き起す場合があります。フロイトが主張するのは、

「イド」、「スーパーイゴ」のやめが、合へ  
がソラ、宗教はスーパーイゴの側に立つこと  
にしてゐる。宗教の戒律や禁制は性的衝動  
や攻撃的衝動を抑制する目的がある。さらに  
また、宗教は完全な道德を目指して、「る  
うで、よりの淫れ村す達反は罪悪感」  
引き起す。極端の場合、罪悪感が生活と  
支配し、麻痺させらるゝからである。まことに  
には、過度の後悔に至らるゝもの、中世  
鞭打苦行派の罪の意識による鞭打ちが  
現代テレビ時代における罪の公然の告白に  
まで及ぶ。

オランダにわたり、罪への自責の問題。  
アライト・シルゲーが研究�。彼女の研究  
は、罪の意識に苦しみ以外、ますゞかしく、  
は、厳格な一部のオランダプロテスチントに  
関するもので、罪悪感がもたらすうる人の  
仕事、思考および行動と麻痺させる影響  
への洞察を与えた。

(M. H. F. van Uden and J. Z. T. Pieper.  
1996. Mental Health and Religion : A  
Theoretical Survey. In Kalina Grzywnala-  
Moszczynska and Benjamin Bent-Hallakani  
Eds., Religion, Psychopathology and Coping.  
Rodopi.)

友好関係が生じるところに加えて、カリスマ  
ゲループは個人的および社会的行動を規制  
する行為の基準を確立する。絶縁一人

セクトの状況では、より外的規制による、集団は心理学的に困難、支配の操作がやすくなる。多數のセクトの行動規範は、現在の性的に寛大、態度に対する反動形成を反映するに見える。

これらの規範は、しばしば多くの儀礼化された集団防衛を採用するだけで維持される。したえは、ハグ、リチャードソンおよびシモンズは、ジーザス運動の一つの分派における、彼らは会員が性的にかめられかねず、彼女は、結婚および家庭の形態を研究した。お愛、肉体的快樂に関するセクト特有の規制の大要を説明した。したえは、データをす：これは不適切と考えられるからである。誘惑や罪に至りかねず、からだつた。セクトに入会中の人の能の同様の変化は、前に述べた統一協会の会員に関する研究に現れた。この七十六パーセントが性について考える、この“非常に”避けたと述べたが、入会の前には十一パーセント、のよりに感到するかつて報告した。したがって、集団心理は本能の要求の表出の統制や、ほのかの葛藤の統制に重要、後割を果たす。

### (三) 刑法 (Gelaten)

以上の通りに、宗教的悪業を規定する教義には、人の思考や行動を強く統制する作用があります。

アーティスト、オウムの教義にもまた、ある思考や行動を宗教的意義として規定するものがあります。たゞえば、私が出家した直後の平成元年四月二日、麻原は次の内容の説法をしてます。

「わたくしたちの修行、妨げぬ眠気、貪り、怒り、真理へオウムの教義を考えていながら、差一つかえめ（ません）と否定してくる。気持ちは悪魔であり、取り返しつかない、迷ふ生き繰り返す」

「現代人は快樂を追求し、真理の実践をしていき、今の三悪趣（地獄・餓鬼・動物）に生まれ変わる」

「説法を復習せず、間違ふ流すとサマナ（出家者）をやめるという結果になり、迷いの生に入り、三悪趣に生まれ変わる」

また、クンダリニーが覚醒すると、「魔境」に入りやすくなると言われて、「おは、おは、おは以上」、「人生の挫折」、「生まれ変わっても続くなりまう恐ろしい修行の挫折」とされる状態です。「アーティスト、魔境に落ちたためには、アーティスト、魔界（解脱）、指導者」と持つ、「功德（神）」、「アーティスト、布施（奉仕）」と積む、「強い信持（ケルと真理を強く信じる）」、「真理の実践」すこぶる必要な説かれています。（麻原彰晃著「超能力秘密の開発法」、日生死超える口、日マハヤナ・ストラ）

より類の教義はほかにも多數あります。しかし、これらは信徒にとって、麻原教団、あるいは教義に離脱を困難にしてしまって、麻原や教義に対する思考や行動を統制するものでした。よって、作用は信徒が違法行為の指示に従つたり、事件が明らかになると後でも脱会しなかつたりする原因の一つです。

私が教義に疑問を抱き、脱会に至るまでには、次のように悪業をされる行為をする二つの慣習がありました。  
逮捕された後、供述する悪業による内容につけて、私は取調べ官の追及を避けようつゝにまつたと供述でき、その状態であります。身を引きちぎられるように感しました。そのような状況において、私は軽度の悪業による内容を少しずつ供述せざるを得ませんでした。私が最初に話したのは、地ト鉄内で自身がサリンを発散させた、單独行動の部分でした。事件に関する限り既に明らかになつてました。状況であります。個人的の行為について供述するうちでは悪業に、もとより思つたのです。  
その後、黙秘を供述を何度も繰り返して、長期間かけて動機のアジラヤーとの経済の教義の、いや麻原の事件への関与につづいて述べてきるよつてになりました。

以上のようには、自覚して、うらに恐怖を喚起する教義の影響を受ける場合があります。また、宗教的悪業を規定する教義そのものに興味を抱いてしまうと、これは考え難いですが、多くの信徒がよつて、周辺外の教義を容し、思考や行動が制限されたり、人に対する不満、地獄への恐れは実感が近づくべく概念を強調する思想には、恐怖の喚起が起ります。

規範意識を兼容させる集団  
がまた、宗教的経験と恐怖の喚起に  
つづき述べさせていた。次に、次に、  
これらは基礎とする思想に沿うように個人の  
規範意識を兼容させ、常識から逸脱した  
思考や行動をさせる集団の作用につづき  
補足致ります。

オウムにわざは、集団の作用によつて、教団の  
規範に客観的現実性が付与され、さらに、  
信徒の規範意識が兼容したと思われます。

オウムの信徒の多くは、教義に基づく宗教的  
経験にて、個人のため、次のよつて、宗教的  
経験のもの、個人的現実性と、社会的現実性  
も加わり、信徒は個人的・非現実的宗教経験と  
客観的現実であるとのよつて、認識して、ます。

現実性とは、当該の所信の内容が客観的  
現実にてあたかも存在して、るより、感覚  
の程度であり、個人的現実性と社会的現実性  
の二つを仮定す。個人的現実性とは当該の所信  
の内容が直接知覚や論理的推論にて個人的  
経験を通じて客観的現実にてあたかも存在  
して、るより、感覚の程度である。社会的現実性  
とは、当該の所信の内容が他者の経験や他者に  
よつて合意されて、るといつて間接的経験と  
通じて客観的現実にてあたかも存在  
して、るより、感覚の程度である。

一西田公昭 一九八八 所信の形成

変化の機制についての研究(II)  
実験社会心理学研究 二八、六五、七二

アーティスト、オウムにおりては、信俊たちが客觀的現実にて總識して、宗教的經驗を根據とする行動規範が定められて、また、<sup>アーティスト</sup>信俊によつては、<sup>アーティスト</sup>その規範も現実的<sup>アーティスト</sup>である。されば、殺人と救濟するわざ<sup>アーティスト</sup>善<sup>アーティスト</sup>です。規範は、前述(本文三十一頁)のまゝに輪廻転生、麻原の救済能力、および現代人の苦界への転生<sup>アーティスト</sup>とに係わる宗教的經驗に基づいて、<sup>アーティスト</sup>一般的・社会通念は「命は地球より重い」<sup>アーティスト</sup>です。<sup>アーティスト</sup>かよの世の一生限りの命<sup>アーティスト</sup>、<sup>アーティスト</sup>の日常的經驗に基づいて、<sup>アーティスト</sup>のうです。

ところがオウムでは日常的經驗のほうは、宗教的經驗によつて幻影<sup>アーティスト</sup>とされ、無意味化されて、<sup>アーティスト</sup>そのため、宗教的經驗に基づく行動規範が一般社会のものに取つて代わつて、<sup>アーティスト</sup>のうです。

實際、信俊は教団独特の規範以後、麻原の指示であれば殺人まで犯します。<sup>アーティスト</sup>信俊の見地からは、教義の世界<sup>アーティスト</sup>が幻覺的經驗によつて現実にて知覚され、加えて周囲の人たちも世界観<sup>アーティスト</sup>が合致した思考や行動をいたします。<sup>アーティスト</sup>ため、教団の規範も現実的反映<sup>アーティスト</sup>したのです。つまり、教団内では教義<sup>アーティスト</sup>のものが世界<sup>アーティスト</sup>を実現してゆり、信俊はその中に没入する状態です。

以上の通りに、オウムにおなづは、信徒の規範意識が教団で通用して、るものに兼容へ、信徒は常識から逸脱した思考・行動を一貫して、集団の、より多くの作用につけて、次の二点がいわれています。

そもそも人は、うんざり信念を抱いている。その中には善悪の規範基準による信念も含まれる。これらの信念は、親、教師、友人、知人など相互作用を行いつゝから獲得され、社会的・共通性ができあがつて、いる。しかし形成された信念がどうして、良いのか悪いのかの判断基準は、所属する社会における暗黙の価値観に左右されるものであつて、個人が所属意識とともに参照する社会集団によって左右される。

(西田公昭 静岡県立大学大学院准教授  
作成の宏瀬健一に関する意見書)

カリスママグistrateは、集団凝聚力(会員を集団に従事させ続ける影響力)、共有信念、变成意識、行為の規準、およびリーダーの魅力の影響は、公然の強制ではなくても、行動の服従は強い、感情は變化させる作用です。

バイオンやエスリエルのより、集団心理の理論家は、個々の構成員の意志にかかります。避けられず、問題が集団におなづは

現れる、ここに指摘しておいた。不可解な個人の行動を彼らは説明するが、それは依存傾向や闘争一逃避パタークのより、集団につきものテーマの現れかも知れぬ。よしにつけば、集団が構成員をあたかも一つの集合体に見えるようるものである。

### (前出 Galanter)

以上の通りに、集団には個人の規範意識と本能的要素の表出や行動を統制する、これが報告されて、ます(本文四三〇~四十四頁の引用)。

このほか、カリスマケループの規範が、会員の規定する作用があります。したがって、集団に係わる場合、それが会員の規範意識と一般社会のものと異なるように要容され、か確認すべきだと思します。

まず、集団の会員が共有する、ビリーフが適切に合理化されて、らぬ要素があります。たとえば宗教では、教典自体には非現実的、表現が見られる、といふまれてはあります。しかし通常は、の通り、表現は信仰と日常生活中に摩擦が生じ、かくして合理的に解釈されて、ます。集団の会員は会話にてて、かくして多くの人のビリーフが形成されたりが理解に苦いむ場面がある。ならば、この集団はビリーフの合理化がされておらず、会員の価値観や規範意識が不適切に要容さざる可能性があります。

項目の選択に偏りがあるかも知れませんが、次の方の確認も必要でしょう。

。指導者や教えへの服従か、  
この服従か、たとえば宗教上の指導における  
このように範囲が限定される事によく見え  
ても要注意です。実質的にはこれが生活  
全般に及んでいることがあります。かかる  
状況におとも、会員個人の判断が尊重  
され、る必要があります。また、教えに疑念  
を抱くことや脱会が制限される場合は問題  
です。

### 。過度に厳しく規則がある

思考や行動に関する道德的規則や、社会  
通念と比較して過度に厳しくあります。ま  
社会における生活が常ににくく、あります。ま  
結果、社会からの離脱が促進される、とも  
あります。また、規則違反に対する過度の  
恐怖が喚起される場合は問題です。

### 。自己を否定される

自己を否定される、指導者に服従す  
結果になります。オウムにおこなは信従は  
煩惱を有して、（本文二十頁）ためには  
判断ができます、これが可能となるのは最終解脫者  
である麻原だけとされていました。  
ナノ、これは私にとって、体験的にも事実と  
思われます。私は自身が悪業（カルマ）で

汚れていたところまで、麻原だけが手入れを淨化できることを感じたのです（本文二十八頁）。結局私は、これまでの人生が煩惱や悪業で増大させられただけのものだったことを認めざるを得ず、自身の経験や知識を信頼できなくなってしまったのです。私は、私が愚かにも麻原に従つた原因の一つです。

○会員が一般社会から離れ、集団生活に入る傾向がある。

一般社会は非合理的に否定する教えが流れ（本文二十七頁）会員はそれから離れる。集団生活に誘導する。集団は問題です。会員の価値観や規範意識は相当程度変容してからと考えられます。集団生活に入った後は、さうに規範意識の変容が深まり、違法行為に及ぶ可能性もあります。

次の内容は、麻原が信徒に生家を辞えて、昭和六十三年十一月（本文二十七から二十九頁）の彼の指示です。人材をねらうとする人材を集め、強い意志が感じられます。これは教団の大師へ解脱・悟りを認めた高弟のメモで、一般信徒には明らかにされていません。

六三年一月五日は黙示録の予言で麻原が七つの予言の後世界戦争。二〇〇〇年まであこ一二年かかる。

## 滅亡の日の出版

一五日、オウムの方向性：（約聖書による）オウムの時間はあれ七年、石油にてハルマケドン、米、日、世界大戦デザイン編集部、プロパガンダマシンに完璧に成り立つて、人材の経済力のためでもあります。

- 一、新信徒の獲得、二、人材（ハシタ、ブレーンハント）、（信徒の中から選ぶ）、
- 三、大学理数化学の人材をねらう、
- 四、トクター（医学）を集める、
- 五、美人を集める（看板）、六、経済的センスを持つて、の人間（プロパガンダ広報）、
- 七、法律専門家、八、大師（一人で二、三億）
- 九、建築班（100人）
- 一〇、七年後大師だけで二四五〇〇億

が、右のように、麻原は理系の人材の獲得を重視してます。それは當時既に科学技術を用いた大量殺人である、ヴァジラヤーの救済主意圓して、そのためと思われます。実際、昭和六十三年十月二十八日、麻原は出家者に対する次の説法を立てます。——在家信徒による説法と聞くには禁じられていました。——ヴァジラヤー十の救済宣言した説法（本文三十二）、（三十三頁）にちなんで、残すべき者以外はボアする旨説いてます。

近ごろ私は少しずつ変わってきた。いる。

不地動物化  
不可能化  
つまう。今の人間  
残す。私の役割

、おまけ四つの観点のカルトについて述べ  
させていたたきました。しかし、入会防止の  
目的よりて、あれに関連する内容は限定されて  
おり一言的につい説明が不十分でもあります  
オウムのすべてが網羅されて、うわけではありません  
ません。なぜ私はカルトのすべてを論じる  
立場ではあります。その意味では、  
本文は、オウムへの入会を防止するための手紙  
であります。  
よし理由で、カルトへの入会を防止するためにも、  
実学としてカルトのすべてを知るためにも、  
専門家による著書（マインド・コントロール）は  
何が（西田公昭著 紀伊國屋書店）  
お勧めします。

また、本文にはオウムの教義の概念が  
氾濫して、るのを、比喩様にこのように受け取ら  
れたり、気掛かりでもあります。おまえも、  
私は多くの方々から質問を受けてます。  
説明責任があると思つて、うる限り回答  
をさせていたたきましたが、私どもの愚行を  
お伝えするには失敗すら多かったです。  
殊に宗教的経験に深かる方によろしくの方の  
人生経験に沿うまつに別の解釈をされて  
しまって、とか多々あります。人は自身の  
経験に基づき物事の理解すらありますか。  
無理もあります。

アリ、よほどは説明方法を要え、具体的な  
描写などを説明する文献の引用を加え

まだ、とても理解が困難であるからこそ思ひますから、容赦願います。

現在、私はオウムの教義や麻原の神格を全否定してます。この一連当性の根柢は、宗教的経験について、脳内神経伝達物質が活性過剰な状態で起る幻覚的現象とて理解してゆく。教義のう意味は、と考えて、るからです。

されば、何より理由があれ人間にして堪えません。罪を犯して、これは慚愧の念に、生命は取り戻すことができません。遺族の皆さま、重傷を負われた皆さまや、家族の皆さまの苦しみが今後も続くてあろうと考えると、後悔の念ばかりが浮かびます。

また、オウムの教義や麻原の神が離れた今、私は無信仰の状態になります。しかし、宗教の価値は認めています。信仰によって人格を高められ、方々が多數いらっしゃるからです。人间には超越的仔任を感じる資質が備わって、るのをよう。それは人類が誕生して以来、かかるところがあつても、権力の彈圧されても、科学が発達しても、宗教が存続して、るところが証明してます。その資質によつて人格を高めることは決して否定できません。しかし、超越的仔任 자체も、私には

否定できません。中上げる  
2、超絶的存続も否定できません。中上げる  
「私は私が述べてきましたので承認して  
いると思われるかも知れません。実は宗教的  
経験は脳内伝達物質が活性過剰の状態で  
教義の意味は、うつろいでも私の  
個人的経験によってうつろ感として受けた  
ので、客観的真実では、と自覚して  
います。私の経験に基づいて多くの方々に  
手書き納得していただける程度の説明を  
するには不可能です。元々、よ種の科学的に厳密な  
科学的証明が可能でないに定義づけます。  
之がで、かくかくです。そのため、カルトの  
超越的貢献觀につきても、あれと科学によつて  
排斥するには極めて困難です。  
また、前にも禅の瞑想の例を挙げました  
のは、オウムの技法と本質的には違はずですが、  
まことにもちろん教義は大違はずが一  
つまう。オウムは多くの文化遺産を採用  
してきました。の場合、伝統的の承認されて  
おり、有益性もあり瞑想技法とオウム的  
ものが、おも同樣であります。しかしながら  
、うつろいも同様であります。おもつて、社会的  
要因によっても、カルトを構成する要素を  
排斥します。これは難いのです。  
おものエアポケットにおいて、カルトはつ

多くも生息し続けるかも知れません。  
ところばは最近は「スピリチュアル」が話題に  
なっています。これは「スピリチュアル」とは、え  
んからも「それよりかは、その超越的せ角觀が  
有益なものか有害なものか注意深く見守る  
ため要があると思します。もし「怖い喚起する  
念が含まれて、あるいは影響を及ぼす。  
人は日常生活に支障をきたすことがあります。  
逸脱価値観が相対要容して、社会通念の  
行動となる人も現れるかもしれません。  
以上のような状況からしては、結局、各個人が  
カルト的理解し、その基準で定めるいか  
う。本文が少しでもよき後にな  
立てれば幸いになります。

平成二〇年六月二十五日

広瀬健一